

『第二の性』の歴史的射程

—フェミニズム「経済学批判」に向かって (1) —

青 柳 和 身

- I. 課題意識
- II. 問と方法
- III. 構成とメッセージ (1) …… (以上本号)

I. 課題意識

本編および続く二編の論考は、21世紀初頭(2005–2015年)日本における「ジェンダー革命」を予測する試みである。第一編では『第二の性』の検討を通じてフェミニズム的視点からの「経済学批判」の課題提起を行い、第二編ではボーヴォワールの視点からの現行『資本論(経済学批判)』の再検討を通じてフェミニズム「経済学批判」の方法的考察を行い、第三編では、第一編と第二編の考察を基礎にして、ボーヴォワールの視点から日本社会の変容・変革の可能性についての分析を通じて、21世紀初頭日本のジェンダー革命についての予測的検討を行う。

未来を予測することは、たとえ近未来であっても膨大な学問的営為が前提となることは言うまでもない。そのような前提を欠いたままとりあえず試論的なかたちで公表することを決意した動機についてまず述べておきたい。

筆者はロシア農業史研究、とくにロシア革命期(1902–1921年)¹⁾の「農業・

土地問題」の歴史的解明を主たるテーマとして研究を行ってきた者であり、フェミニズム理論や現代日本社会の研究分野では全くの門外漢にすぎない。しかし拙著『ロシア農業発達史研究』の準備過程でジェンダー史的研究視角の決定的重要性とジェンダー史的視点の弱さによる経済史研究の発達障害という課題意識を痛感するに至った²⁾。

ジェンダー概念は社会認識における斬新な視点としてフェミニズム理論によって提起されたものであり、ジェンダー視点による現代経済・社会分析としてはそれなりの新しい成果をもたらしていることは周知の通りである。しかしフェミニズム理論を歴史分析、とくに経済史の分析用具として利用することを考慮した場合、フェミニズム諸理論の党派的対立のため、社会科学の共通用語としての利用可能性はきわめて限定されてしまうということも痛感せざるを得なかった。社会認識の革新的理論として登場した「ラディカル」フェミニズムと「マルクス主義」フェミニズムの分裂的対立は、フェミニズム理論の学問体系としての発展を決定的に阻んでいる³⁾——これがジェンダー的経済史研究という課題意識から見た場合の直観的認識であった。

この直観は筆者のみのものではなかった。森田成也『資本主義と性差別』（青木書店、1997年）は筆者と同じ課題意識の下に書かれたものであるが、理論経済学という伝統的に最もジェンダー視点の弱い経済学分野からこの課題意識をもった著作が出現したことは注目すべきことである。このような課題意識をもつ経済学研究者は少なからず存在するに違いないというのが同書を読んだ筆者の率直な感想である⁴⁾。

カイロ人口開発会議（1994年）および北京女性会議（1995年）で提起された女性の人権としての「生殖権 reproductive rights」と「性的権利 sexual right」の概念⁵⁾は、「ラディカル」フェミニズムの理論系譜に属するものであるが、筆者は最近、この視点に立って『マクミラン世界歴史統計（I～III）』（原書房、1983-1985年）を歴史人口学および労働市場論的視点から分析するとともに、新訳として出版された『第二の性』⁶⁾を検討することで次の三つの直観的認

識が得られた。

第一に、日本型企業社会は2005年から2015年を含む時期に「ジェンダー革命」の現実的可能性に直面すること。

第二に、日本のフェミニズムが、「ラディカル」フェミニズムと「マルクス主義」フェミニズムに分裂しているかぎりには、この現実的可能性は「見えない」が、両者が統一的視点に立つかぎりそれが「見える」ようになること。

第三に、『第二の性』は、両フェミニズムを統一しうる基礎的視点、いわば「^{ラディカル}根源的マルクス主義」の視点を内包しているばかりではなく、理論的可能性としてはマルクス=エンゲルス学説のみならず、抽象的「人間」を措定し、その行動を対象としたすべての抽象的「人間」(社会) 諸科学を革新しうる要素を内包していること。

エリザベート・バダンテールはボーヴォワールの追悼文の冒頭で次のように書いている。

「女性たちよ、あなたがたは彼女にすべてを負っている。」⁷⁾

女の問題は同時に男の問題でもあるとすれば⁸⁾、この文は「人間」の現実態としての「女と男」は「彼女にすべてを負っている」という意味になる。『第二の性』への直観的認識として、筆者はこれに基本的に同意したいと思う。また追悼文の末尾で次のように書いている。

「完全にとはいえないが、未知の場所を征服したいといひひとよ、安らかに眠ってください。」⁹⁾

「未知の場所を征服」ということの意味はかならずしも明らかではないが、『第二の性』(1949年)以前の近代の全「人間」諸科学が到達できなかった未知の地平の扉を開いたという意味を含むならば、筆者はやはりこの主張に同意したいと思う。直観的認識の第三点は以上のような意味を含んでいる。

第一点、第二点の問題を少し敷衍しよう。

1848年に刊行されたマルクス=エンゲルスの『共産党宣言』はそれ以前

の全「人間」諸科学を革新する未知の地平の扉を開いた著作であり、その社会認識の核心的部分、すなわち最後の階級社会としての歴史認識を前提した近代社会の「階級」概念は1867年から刊行された『資本論』の経済学批判体系として結実し、「20世紀社会主義」の形成とその反作用としての20世紀資本主義の変容に巨大な意義をもったことは、19世紀後半から20世紀の歴史を直視する歴史家なら否定しえないところであろう。

1949年に刊行された『第二の性』は1960年代後半以降から「ジェンダー」概念を核心的部分とするフェミニズム理論として学問的な結実を見た。しかしこの結実には21世紀の時代を理論的に創造するような学問的体系性を伴ったものであろうか。残念ながら否である。これは『第二の性』が開いた広大な学問的および実践的領域とそこに含まれている発展可能性ある原基的思想が十分活かしきれていないためではないか、というのが第一点、第二点にかかわる直観的認識である。

『第二の性』の原基的思想を発展させ、「ラディカル」フェミニズムと「マルクス主義」フェミニズムを統一するようなフェミニズム理論の体系化のために不可欠な作業は、フェミニズムの古典である『第二の性』とマルクス主義の古典である『資本論』とを、両者の社会認識の方法論まで含めて比較検討することであろう¹⁰⁾。しかしこの課題の必要性を自覚することは同時に筆者にとってジレンマに直面することでもあった。

以上の課題は良識あるフェミニズム理論研究者なら十分自覚しうる問題であり、新訳の『第二の性』を基礎にして筆者よりはるかに着実に創造的な仕事が可能であろうと当初考えていた。しかし最近になって『第二の性』はもう「古い」という言説があることを知り驚きの念を禁じえなかった。もし『第二の性』は「古い」というような言説がフェミニズム理論の領域で流布するような条件が存在するとしたら、21世紀初頭の「ジェンダー革命」の主體的（理論的）創造はほとんど絶望的だからである。これは筆者にとっての外的ジレンマである。

しかし内的ジレンマの方がより深い。筆者はフェミニズム理論にかんしても現代日本社会にかんしても研究蓄積はきわめて少ない。それだけではなく、より根本的な問題であるが、筆者は「男」である。男にとっての女のセクシュアリティとそれに規定された女性的心性は、ボーヴォワールが女の立場から男について評したのと同様に、「うかがい知れないものが存在する。」¹¹⁾

アダム・スミスが自覚していたように人間の「同感 sympathy」能力は、人と人との関係構造にかんする普遍的認識を獲得するための基礎的条件である¹²⁾。しかし女と男の間には、「人間」としての共通部分があると同時に「女」と「男」の相違、とくにセクシュアリティのレベルでの相違は、たとえばそれが極小的なものであれ「存在」しており、その限りで「同感」可能性は制約されていると見なされている¹³⁾。筆者が理論的実証的準備の不十分なままに、「ジェンダー革命」仮説の提起を試みたとしても、女性フェミニストから「男性視点からの言説」にすぎないと断定されたとしたらそれでおしまいである。この意味で内的ジレンマはより深いものがある。

ジレンマに悩み、結局「ここがロードスだ、ここで跳べ」という命題¹⁴⁾に従って学問的冒険をするほかはないという結論に達した。跳ぶことに失敗した場合、どのようなかたちで「笑い者」になるかを前もって公表した上で、「ここ」すなわち自己の学問的立脚点で跳ぶことを試みることである。2015年には予測の結果はほぼ判明しているので、予測に失敗した場合には一切の自己弁明をせず、筆者の学問的方法論、認識論まで含めた根本的な自己批判をすること、これが学問上の意味での「笑い者」のなり方である。本稿での予測はこのことを予定したものであることをあらかじめ公表しておきたい¹⁵⁾。このような方法を認識論における「ロードスの」方法と呼んでおこう。

以上が本稿の執筆動機である。

社会事象を予測する際に不可欠な予測者の態度として、使用する分析的概念の明晰性、予測者の時代的心性への客観性、予測者自身の実践的責任性の

問題について述べておきたい。

社会的概念は社会実態の抽象的反映であると同時に歴史の具体相を認識する手段でもある。それゆえ予測のための分析用具としての概念は可能なかぎり明晰でなければならない。予測に使われる中心的概念は「ジェンダー」であるが、この用語はあまりに日常的に使われているため概念の内容に混濁が見られる。

たとえば1949年以前のすべての抽象的「人間」諸科学にはマルクス主義も含めて「ジェンダー」概念の核心としてのセクシュアリティにかんするある独自の理解が欠けており、「ジェンダー」認識自体が欠落していたということを忘れてこの用語を使用する例がよくみられる。『資本論』の中に女性が担っている家事労働の論理が欠落していることを批判する目的で「ジェンダー・ブラインド」という言い方をする場合がこの典型的事例である。労働にかんする性別関係を検討するとしたら、マルクスやエンゲルスも用いた「性別分業 the sexual division of labour」概念で十分であり、ことさら「ジェンダー」概念を用いる必然性はない。

このようなジェンダー概念にたいする混濁した理解を避けるため、本稿ではこの用語の利用を極力回避しながら、「ジェンダー」の核心的内容を明晰にするよう努める。行論の都合上ジェンダー的内容の表現が必要になった場合、その同義語的表現として「ボーヴォワールの」という表現を用いる。

冷静な未来予測のためには予測者は時代的心性にたいし可能なかぎり客観的でなければならない。しかし筆者も現代の生活者であるかぎり時代の心性の影響を免れがたいが、それにたいする客観性をいかにして確保するかという問題がある。

本編とそれに続く第二編では20世紀中葉に刊行された『第二の性』と19世紀後半に刊行された『資本論』の社会認識と社会認識の方法論を現代的地点から比較検討する作業を行う。この作業は現代という時代を客体化し、筆者の主観的判断を可能なかぎり除去することにも役立つであろう。

最後に予測者自身の実践的責任性について簡単に触れておく。社会事象の予測は予測行為そのものが実践的性格をもっており、予測者自身の実践的責任を伴うものである。筆者はこの責任を引き受けるつもりであるが、この面についての具体的指摘は第三編で行う。

〔注〕

- 1) ロシア革命は通常言われるような1917年「10月」(西暦「11月」)革命ではなく、1902年から1921年に至る約20年間にわたる連続革命であった。拙著『ロシア農業発達史研究』御茶の水書房、1994年参照。
- 2) この課題意識についてはきわめて未熟であり、問題点を含むものではあるが、同上書、9-11ページ参照。
- 3) 「マルクス主義」フェミニズムと対立する思考枠組みのため、それを十分に理論的に包摂できず、理論の「根源性」に限界がありうるフェミニズム理論を「ラディカル」フェミニズムとし、「ラディカル」フェミニズムと対立する思考枠組みのため、それを十分に理論的に包摂できず、弁証法的発展力あるマルクス的方法論として限界がありうるフェミニズム理論を「マルクス主義」フェミニズムとする。この記載方法は、両派の客観的検討のための形式論理の手続きである。
- 4) なお同書の書評として拙稿、『経済科学通信』No. 89, 基礎経済科学研究所, 1999年3月, 98-100ページ参照。この書評には、本編を含む三連作の原基的思想はすべて含まれている。以下引用の際にはすべて敬称を略させていただくが、それは諸業績を客観的作品として評価したいためである。
- 5) 厚生省人口問題研究所編『国際人口開発会議』同所刊, 1995年, 外務省監訳『国際人口・開発会議「行動計画」』世界の動き社, 1996年, 北京女性会議に提言する会『北京女性会議行動綱領草案対訳』アジア女性資料センター, 1995年, 総理府男女共同参画室『第4回世界女性会議及び関連事業等報告書』同室刊, 1996年。なお reproductive rights を外務省訳では「リプロダクティブ・ライツ」とカタカナ語で「翻訳」しているが、本稿では「生殖権」と訳しておく。この概念には原語の複数形的意味(「諸権利」)を含める。
- 6) シモース・ド・ボーヴォワール(井上たか子/木村信子, 中嶋公子/加藤康子監訳)『決定版 第二の性』I, II, 新潮社, 1997年。以下『第二の性』と略称。
- 7) C. フランシス/F. ゴンティエ『ボーヴォワール ある恋の物語』平凡社, 1989年(原書1985年), 604ページ。
- 8) 同, 568-569ページ参照。
- 9) 同, 605ページ。

- 10) ジャン＝ルイ・セルヴァン＝シュレペールは、『資本論』と『第二の性』の歴史的意義について筆者と同様の観点に立っている。同、571 ページ。
- 11) 『第二の性』I, 341 ページ。
- 12) 星野彰男『アダム・スミスの思想像』新評論, 1976年, 19-46 ページ参照。
- 13) 小倉千加子『セックス神話解体新書』(学陽書房, 1988年)は, 女性心理学者の立場から, 「セックス神話」を徹底して解体したとしてもなお残るセクシュアリティにかんする女と男の間の認識のギャップ(深淵)について語っている。同, 20 ページ。
- 14) 資本論辞典編集委員会『資本論辞典』青木書店, 1966年, 672 ページ, 『イソップ寓話集』岩波書店, 1942年, 54 ページ参照。
- 15) このような方法の場合, 学問的意味での「自己弁明」とはどのようなことかということをおおまかじめ明確にしておく必要がある。「自己弁明」とは, たとえば1991年のソ連崩壊前後の時期における「社会主義」論の大幅な見解変更の際にしばしば見られたものであり, 自己の方法論・認識論上の根本的自己批判はせず, 情報不足や誤情報という外部要因に自己の認識論的弱点の責任を転嫁する方法である。また同様な事態は, 1991年8月19~21日のソ連のクーデター発生の際にも見られた。日本のソ連問題専門家の大多数はクーデターの短期崩壊の予測に失敗したが, 短期崩壊後の見解変更の際にも同様な弁明が見られた。[筆者の短期崩壊「予測」は, 天安門事件の中国とは異なった, ソ連のジェンダー的状况を考慮したものにすぎなかったが, 幸い的中した(『南日本新聞』1991年8月20日朝刊第18面)。]

筆者の「(20世紀)社会主義」にたいする旧認識(未公表)は, 1985年以後のソ連の生活実態の直接的観察とソ連崩壊という過程を通じて大きく変化したが, この変化は「経済」認識にかんする根本的自己批判によるパラダイム転換(抽象的「人間」行動学としての「経済」学のジェンダー的革新の必要性)を伴うものであった。この検討は第二編で行う。また20世紀の「社会主義(論)」のジェンダー視点からの総括(自己批判)は別の機会に行いたい。

II. 問と方法

『第二の性』の内容的検討に先立って, どのような問をもって, いかなる方法でアプローチするかについて明らかにしておこう。

まず『資本論』との比較から, 『第二の性』の叙述方法および書物と読者との関係のあり方を特徴づけつつ, 具体的問題設定を行おう。

構成と叙述の方法の点で両書を比較すると、『第二の性』のきわだった特徴として、専門用語化を極力回避した叙述法をとっていることがわかる¹⁾。『資本論』が専門用語による抽象的概念から具体的概念への上向的展開という構成をとっているのにくらべ、『第二の性』の各部・各章のタイトルは著しく非専門用語的で、きわめて平凡なものである。各部・各章のタイトルは以下の通りである。

I 卷 事実と神話	第三章 性の入門
序 文	第四章 同性愛の女
第一部 運 命	第二部 女が生きる状況
第一章 生物学的条件	第五章 結婚した女
第二章 精神分析の見解	第六章 母 親
第三章 史的唯物論の見解	第七章 社交生活
第二部 歴 史 [章はなし]	第八章 売春婦と高級娼婦
第三部 神 話	第九章 熟年期から老年期へ
第一章 [タイトルはなし]	第十章 女の状況と性格
第二章 [同]	第三部 自分を正当化する女たち
第三章 [同]	第十一章 ナルシストの女
II 卷 体 験	第十二章 恋する女
序 文	第十三章 神秘的信仰に生きる女
第一部 女はどう育てられるか	第四部 解放に向かって
第一章 子ども時代	第十四章 自立した女
第二章 娘時代	結 論

ボーヴォワールは哲学者として人間行為の概念的説明能力は十分であるにもかかわらず、各部・各章のタイトルや叙述法はむしろ専門用語的概念化を極力回避しているように思われる。とくに男女関係の社会歴史性を含意する用語として「ジェンダー」のような新用語の創造も行っていない²⁾。

II 卷の各章のタイトルもごく平凡なものであり、状況設定も普通の女性が体験するような平凡な代表的状況が設定されているが、その叙述内容は平凡

ではない。きわめて具体的な生々しい叙述の迫真力は、読者が男性であったとしても、女性の成長過程とその後の「女の生きる状況」を追体験させられるような強力な力がこめられている。文学者ボーヴォワールの全能力がここに集中的に投入されていることがわかる。

『第二の性』の以上のような構成が読者の啓蒙目的であるとするならば、I巻と、II巻はむしろ逆にするべきであろう³⁾。本書は一般読者への啓蒙を拒否しているかのようにいきなり最高水準の学説の検討からはじまる。本書の以上のような構成と叙述の独自性はいったいなぜであろうか⁴⁾。これが第一の間である。

書物と読者の関係の点でも、『第二の性』の運命にはきわめて独自なものがある。『第二の性』は、刊行直後には、世論の大量の非難に直面し、いわば「孤立無縁」の状態に置かれ、とくに知識人女性が『第二の性』を出版物上で公然と擁護することはほとんどなかった⁵⁾。しかし1960年代以降になるととくに合衆国では知識人女性によってよく研究されるようになり、1960年代後半以降に『第二の性』を公然と擁護するばかりではなく、本書から出発した新たな大量の理論創造が行われた⁶⁾。

これと比較すると『資本論』やその原基的思想となった『共産党宣言』の運命は全く異なっている。『共産党宣言』は『資本論』ほどの国際的な影響力があったわけではないにせよ、刊行直後においても、労働者「階級」視点に立つ社会運動の指導者や知識人の共感 sympathy を獲得し、一定の国際的広がりをもった影響力を与えた⁷⁾。これと比較するなら『第二の性』の読者への影響の過程で生じた共感 sympathy のタイム・ラグは特異なものであるが、これはいったい何によるのであろうか。このタイム・ラグは、『第二の性』の世界が、それ以前の全「人間」諸科学にとって、全く「未知」の世界であったことを間接的に証明しているとも言える。しかしそれにしても、女性達の共感の獲得ですら、一定の時間を要した理由は何であらうか。

『第二の性』は社会的影響の結果の点でも独自である。マルクス＝エンゲ

ルスの学説は両者の死後も「マルクス主義」として継承され、それが決定的に分裂するのは第一次大戦とロシア革命以後であり、分裂は激しい実践的対立によるものであった。しかし『第二の性』の場合、社会的に受容された当初から、「ラディカル」フェミニズムと「マルクス主義」フェミニズムへの分裂傾向があらわれた⁸⁾。この両フェミニズムの分裂時点では、かつてのマルクス主義の分裂のような激しい実践的対立に直面していたとは思われないが、この理論上の分裂はなぜ生じたのであろうか。『第二の性』自体に分裂をもたらす要因が含まれていたのであろうか。それともそれを受容した側に分裂の条件があったのであろうか。両派ははたして『第二の性』が開拓した広大な理論的実践的領域を全面的に継承したのであろうか。

『第二の性』とその受容のタイム・ラグ、および分裂的受容という問題の検討のためには『第二の性』が開拓した領域の認識論上の問題まで踏み込んだ検討が必要ではあるまいか。これが第二の間である。

次に以上の間の検討方法について述べておきたい。

筆者はボーヴォワールの専門研究者ではなく、ボーヴォワールの作品全体の中で『第二の性』を位置づける能力はない。また『第二の性』自体についての研究史についても無知である。したがって『第二の性』の原典以外の諸資料によって『第二の性』を解釈することは全く不可能である。しかしこの弱点は『第二の性』にかんして何らの予断もなく接近するには逆に有利である。したがってここでは『第二の性』の検討の唯一の方法として、作品そのものに内在するという方法をとる。「内在」ということの意味は、第一に部分的不明点や問題点は『第二の性』全体の論旨のみによって解釈するということである。また第二にボーヴォワール自身の主観的意図から自由に作品を解釈するということであり、この延長上にはいわゆる「生産的(創造的)誤謬」も含まれる。『第二の性』や『資本論』のような古典は、執筆時の作者の主観的意図を離れ、作品そのものが創造的な知的生産の源泉となり、それゆえに時代の制約を乗り越えて新解釈を生み出しつつ読み続けられるという

作品自体の「固有価値」をもっている。『第二の性』や『資本論』はこのような態度で読まれるかぎり、20世紀よりはむしろ21世紀にこそより多くの知的創造力の源泉となりうる可能性をもった著作であるように思われる。

本稿で、たとえば「全体構成から論理必然的に帰結する問題」といった表現をする場合、現代の問題を『第二の性』に投げかけた時、『第二の性』の「内在」論理としてはどのような解答が可能かというレベルからの筆者の考察であって、ボーヴォワールの主観から離れて自由に作品自体と対話しているということを意味している。

IIIとIVでは、ここで提起した問題を検討する場合決定的に重要だと思われる文章を摘記しつつ検討する。その際、構成の連関性や各構成部分の課題の指摘、「ラディカル」フェミニズムと「マルクス主義」フェミニズムにかかわりうる指摘、「ジェンダー」の原基的思想となりうる指摘、および叙述の前提となっている認識論にかかわる指摘に留意して検討を行うが、内容の要約的紹介は行わない。各章の豊かな文学的叙述を要約してしまうことは『第二の性』の内容を薄いものにし、かえって理解の妨げになる可能性があるからである。

最後に検討に必要な使用用語について暫定的に定義しながら、検討の範囲について限定しておきたい。

まず本稿で使用される「セクシュアリティ」について暫定的に定義しておこう。「セクシュアリティ」とは特定の様式をもった諸個人の性・生殖行動とその結果としての個人的な性的心性であり、諸個人の性的心性の社会的歴史的集積体系としての性規範や性的言説を含まないものと定義する。また性的言説や性的記号によって形成される個人の性自認や性意識は何らかの身体的性的快感の自覚経験以前のものである場合、「セクシュアリティ」には含めない。性・生殖様式と同義的意味で使うが、「セクシュアリティ」の方が包括的である。このような「セクシュアリティ」規定は『第二の性』の「セクシュアリティ」用語と重なっており、また性や生殖にかんする叙述を概念

的に検討するのに適している⁹⁾。しかし本稿の検討結果としては、ここでの暫定的定義に加えて、より根元的な意味がつけ加えられることを前もって指摘しておく。

また本稿では、「ラディカル」フェミニズムと「マルクス主義」フェミニズムの理論史の全面的検討は行われぬ。しかし『第二の性』と両フェミニズムの関係については同書の歴史的意義の検討として本稿の考察対象に含めなければならない。そこで両フェミニズムについて暫定的定義を与えておこう。「ラディカル」フェミニズムとは、社会的性差別(家父長制)の第一次的要因を、実践行為としてのセクシュアリティをめぐる性別関係として理解し、セクシュアリティを社会的諸関係、とくに経済関係の基礎と見る社会観による女性解放理論であり、「マルクス主義」フェミニズムとは、セクシュアリティを非歴史的な「自然」的要素と歴史的観念的「上部構造」とに分割して理解し、セクシュアリティの社会的「土台」としての性格を否定し、人間の実践行為としての労働行為をめぐる性別関係を社会的性差別の第一次的要因(「土台」または「物質的基礎」と理解する社会観による女性解放理論と定義する¹⁰⁾。

本稿で具体的に検討されるフェミニズム理論は、第二派フェミニズム創始期のフェミニズム理論、とくにボーヴォワール自身が後に注目したフェミニストの理論を中心とする。『第二の性』で提起された問題がいかに関承されたか、いかなる問題が継承されなかったのか、なにゆえにフェミニズム理論の分裂が生じたのかという問題の検討が本稿の中心的課題であるが、以上のように対象限定してもこの課題にとっては十分である。

〔注〕

- 1) 実存主義的用語が叙述の補助手段として使われているが、これはボーヴォワールに捧げられた書である『性の弁証法』でも指摘されているように核的思想の展開にとって不可欠なものではない(S.ファイアストーン『性の弁証法』評論社、1980年、原書1970年、13-14ページ)。I巻第一部の生物学、精神分析、史的唯物論の専門用語の使用も必要最小限にとどめている。ちなみに実存主義用語の日本語訳に

かんして言えば、projēt は、^{プロジェ}「投企」として仏語を付すより、「性^{セクシュアリティ}欲」(III注12)参照)の事例と同様に「投^{プロジェクト}企」と英語を付した方が読者に、より親しみやすい訳となったであろう。

- 2) 男女関係を社会的階層関係から問題にする場合、「カースト」用語が用いられているが、『第二の性』の内容は「カースト」概念に包摂されない独自問題が含まれており、何らかの新用語化の必要性もあったとも考えられる。それにもかかわらず新奇な専門用語の使用は一切回避されている。
- 3) ケイト・ミレットが『性の政治学』(ドメス出版、1985年、原書1970年)で行ったように最初に文学的叙述によって「女の現実」を具体的に提示する方が啓蒙目的としては妥当であろうし、旧訳『第二の性』もII巻「体験」を先行させている。
- 4) 『第二の性』の新訳は、原書の構成順序が決定的重要性をもっているという認識を前提して、構成順序と叙述態様に、より忠実な翻訳を行っている。『第二の性』I, 371-374 ページ参照。
- 5) アリス・シュバルツァー編『第二の性その後 ボーヴォワール対談集 1972-82』青山館、1985年(原書1984年)、93-95 ページ、フランシス/ゴンティエ前掲書、416-420, 422-423, 440 ページ。
- 6) フランシス/ゴンティエ前掲書、420 ページ。
- 7) 橋本直樹「『共産党宣言』普及史研究の諸成果」『経済』No.29, 新日本出版社、1998年2月、篠原敏昭他編『共産党宣言——解釈の革新』御茶の水書房、1998年参照。
- 8) 森田前掲書、17-40 ページ。欧米では「マルクス主義フェミニズム」と「社会主義フェミニズム」を区別する傾向があるが、ここでは両者を「マルクス主義」フェミニズムに一括する。
- 9) この定義では、「セクシュアリティ」とは性行動とそれに伴う身体的反応、とくにオーガズム反応を含むものであり、自己行為としてのマスターベーションも含まれる。
- 10) この定義は主として森田前掲書のフェミニズム理論史の整理に依拠している(同、17-126 ページ)。これ以外のフェミニズムの諸理論(リベラル・フェミニズム、母性フェミニズム、エコロジー・フェミニズム等)は本稿の対象外である。またセクシュアリティの意義をいかに理論的に強調しようとも、その社会的「土台」性または第一次要因性を否定したフェミニズム理論は、「ラディカル」フェミニズムには含めない。またいかにマルクス主義理論を導入しようとも、セクシュアリティを労働にかんする性別関係の根源的「土台」とするフェミニズム理論は「マルクス主義」フェミニズムには含めない。

III. 構成とメッセージ (1)

『第二の性』の各構成部分での検討課題についての導入的指摘、各構成部分での重要な内容および総括的指摘について摘記しながら、構成全体からいかなるメッセージが伝えられているかについて検討しよう。まず両性関係にかんする基本的視点、研究課題、理論および歴史があつかわれている序文 (I巻, II巻), I巻第一部, 第二部をとりあげる。

1. 序文 (I巻, II巻)

I巻, II巻の序文における重要な指摘を摘記しよう。

「女は男を基準にして規定され、区別されるが、女は男の基準にはならない。女は本質的なものに対する非本質的なものなのだ。男は〈主体〉であり、〈絶対者〉である。つまり、女は〈他者〉なのだ。……他者性とは人間の思考の基本的範疇なのだ。」(①, I-11)¹⁾

ここには『第二の性』全体の主題が示されている。社会の中での女の位置ばかりではなく、既存の抽象的「人間」諸科学では、事実上「人間」の基準として男が本質的主题となり、女の問題は基準からはずれる非本質的なものとして認識されることによって「人間」行動にかんする学問的体系化が行われていること、社会的にも認識論的にも〈他者〉すなわち「第二の性」としてあつかわれている「女の現実」を主題とすること、いわば抽象的「人間」学にたいする具体的両性人間学の視点からの批判という『第二の性』の基本的課題が提起されている。この課題は、「人間」の現実態(「実存 existence」)は

身体的性別 (sex) としては「女」あるいは「男」のいずれかであり、性自認 (gender) としては「女性」または「男性」のいずれかでしかありえず、抽象的「人間」という研究視角の無自覚な設定それ自体にたいする根本的異議申し立てを基礎として立てられている²⁾。

「ではいったいどうして男女のあいだにはこうした〔相対的他者としての〕³⁾相互性 [réciprocité/(英訳)reciprocity⁴⁾] が成り立たなかったのか。……どうして女はこうした〔絶対的他者としての〕服従にあまんじているのだろうか。……それは女たちが他と対立することで自らを位置づけるような、一つの統一^{ユニテ}体として団結する具体的な手段をもっていないからである。……男女という対は二つの半分が互いに離れがたく結ばれた基本単位^{ユニテ}であり、性によって社会を二分するのは不可能である。これが女を基本的に性格づけている。つまり女は、互いに不可欠な二つの項からなる一つの全体のなかで、〈他者〉なのだ。」(②, I-12-15)

「女は男の奴隷ではないまでも、少くともつねに男の家来 [vassal/dependant⁵⁾ 封臣] であった。……経済面では、男と女はほとんど別のカーストを構成している。」(③, I-15-16)

②, ③は結論的主張であり、②は型として相補化された性的結合による男女カップル関係をセクシュアリティの側面から、③は男女関係を社会経済関係の側面から総括した主張と見ることができる。全体構成を理解するために不可欠な指摘である。③は女性の地位を家内奴隷や資本主義的プロレタリアートに類比させる認識とは異なるものであり、封建制に類比されるような「カースト」として捉えられていることに注目しておきたい⁶⁾。

「どうすれば女は一人の人間として自己実現できるのだろうか。女にはどんな道が開かれているのだろうか。どの道が行き止まりになっているのか。

……こうしたことが、私たちの明らかにしたいと思っている基本的な問題である。つまり個々の人間の可能性を問題にしつつ、それを幸福という観点からではなく自由〔liberté/liberty⁷⁾解放〕という観点から定義していくつもりだ。〕(④, I-26)

以上のように具体的検討課題を女の自由＝解放のための理論的実践的「出口」を見出すことであると明確に問題設定した上で、④に続いて本書の構成順序が次のように提示されている。

「こうした問題は、もし女が生理的、心理的、あるいは経済的な宿命を背負っていると仮定するなら、言うまでもなく、まったく意味を失ってしまうだろう。だから、まず、生物学、精神分析、史的唯物論が女についてどんな見方をしているかを検討することから始めたい〔I巻 事実と神話 第一部 運命〕。次に、どのようにして『女の現実』なるものがつくられたのか、なぜ女は〈他者〉として定義されたのか〔第二部 歴史〕、さらに男の視点から見て、その影響はどのようなものであったか〔第三部 神話〕を実証的に示してみたい。その上で女たちに与えられている世界をありのままに女の視点から描くことにする〔II巻 体験〕。そうすれば、女たちがこれまであがわれてきた領域から脱して、人間の共存^{ミットザイン}に加わろうとしているいま、どんな困難に直面しているかを理解できるだろう〔II巻第四部 解放に向かって〕。〕(⑤, I-26)

「女の世界のただなかで女たちによって育てられた女の通常の運命は、結婚であり、事実上、結婚はいまだに女たちを男たちに従属させている。……だから女の伝統的運命を詳細に調べ分析する必要があるのだ。どのように女は自分の条件を学習していくのか〔II巻第一部 女はどう育てられるか〕、どう女はそれを体験するのか、どんな世界に女は閉じこめられているのか〔第二部 女が生きる状況〕、どのような脱出が女には許されるのか〔第三部 自

分を正当化する女たち], こうしたことを私はここで描き出したいと思う。そうやってようやく、重い過去を受け継ぎながら、新しい未来を作り上げようと努力している女たちに、どんな問題が突きつけられているのかが、わかるだろう [第四部 解放に向かって]。(⑥, II-7)

[]内は構成にかんする指摘を各部の叙述と参照した上で引用者が付したものである。

⑤では生物学、精神分析、史的唯物論という既存の学問体系を最初にとりあげる理由が示されている。それはそれぞれの学問体系が女の現実を基礎的に規定するような問題を内包しており、それが女の自由という視角から見て運命的なものであるか否か、学問体系が女にたいしどのような見方をしているか、どこまでが事実でどこまでが神話かという問題について、引用文①の視点から根本的に再検討することなしには、本書で新たに開拓すべき問題領域そのものが成立しないからである⁸⁾。ここでは三つの学問領域が意図的に選択され、倫理、法律、政治、国家論およびイデオロギー(言説体系)などの領域が対象外とされていることに注目しておきたい⁹⁾。

⑤とII巻序文の⑥では本書の構成がなぜそのような展開方法をとったのかについての重要な指摘がある。II巻の文学的叙述を後半にもっていった理由、また社会科学的な概念的向上展開を回避した理由が示唆されている。専門用語的概念化の回避とII巻の文学的叙述はけっして啓蒙目的のためではない。それは、このような叙述の展開でないと、既存の「社会」(「人間」)科学の概念的思考になれた人々、とくに「新しい未来を作り上げようと努力している女たち」にとって、女が直面している真の困難や女の本当の問題そのものが見えなくなってしまう可能性があるからである。女の真の「問題」の自覚には引用文①②に規定された「人間の思考」法、すなわち認識論上の独自問題が伏在していること、このことが意図的展開方法の背後にあるボーヴォワールの認識であったと言える。

⑤⑥では本書がそのような展開方法をとったもうひとつの理由が示されている。本書はその展開の最後で、「問題」そのものを提示するのが目的であって、けっして「問題」自体の分析・総合が目的ではないからである。では本書の最後で提示される「問題」とは何か。これを「ボーヴォワールの問題」と呼ぼう。以下、本論の構成の分析では、「ボーヴォワールの問題」がいかにして開示されてくるかについてのプロセスを中心に検討しよう。

2. I 卷第一部「運命」

第一部の各章の導入および総括的指摘について重点的に摘記しつつ検討しよう。第一章(「生物学的条件」)の導入部の指摘と主題にかかわる重要な指摘および総括的指摘は次の通りである。

「雌が男にとって軽蔑すべき、敵視すべきものに見えるのは、明らかに女にいだく不安にみちた敵意のせいである。それなのに男はそうした感情の根拠を生物学に求めようとする。」(⑦, I-29)

「ヘーゲルは、二つの性は異っているはずだと考える。一方は能動的で、他方は受動的であり、言うまでもなく受動性が雌の分け前である。『二つの性の分化の結果は、男が能動的要素であり、一方女は受動的要素である。なぜなら女は未発達¹の統一体のなかにとどまっているからだ』。」(⑧, I-35)

「自然は人間の行動によって捉えなおされる限りにおいてのみ人間にとって現実となるのだ。人間自身の自然も例外ではない。……生物学だけでは、私たちの頭を占めている問題、なぜ女は〈他者〉なのかという問題に答えを出すことはできない。歴史の流れのなかで、女における自然がどのように捉えられてきたのかを知る必要がある。」(⑨, I-60, 62)

⑦⑧は男女の社会的相違を生物学的「自然」として捉えようとする男性的神話の批判であり、とくに男女の性関係における男の能動性と女の受動性を生物学的「自然」と規定するヘーゲルの性差観¹⁰が⑦の視点から批判されている。これは後述するように男女のセクシュアリティを徹底した非生物学的な歴史的視点から検討するために決定的に重要な指摘である。

⑨は女性独自の生殖機能の検討の総括である。人間の歴史に直接かかわりをもつ「自然」を、「土地自然」のみならず「人間自然」としても捉えるというマルクスと共通した視点が打ち出されている¹¹。この視点からすれば、「人間と自然」との関係行為には、土地自然的関係行為としての労働行為のみならず、人間自然的関係行為としてのセクシュアリティ（性・生殖的行為）も含まれること、男女の性関係において女が〈他者〉であるのは生物学的要因ではなく、歴史社会的要因によってのみ理解可能であることが強調されている。

第二章（「精神分析の見解」）の導入部と重要な指摘および総括的指摘は次の通りである。

「精神生理学に精神分析がもたらした大きな進歩は、精神生活に関わることがらはどれも必ず人間的な意味をおびていると考えた点である。……女は自然によって定義されるのではない。自然をどのように感じ、自分のものにするかによって、女が自らを定義するのである。こうした観点から、〔精神分析という〕一つの体系が築かれた。」(⑩, I-63)

「ある一定の時代の、ある共同体の技術や社会経済構造はその成員すべてにとって同じ一つの世界として現われる。それゆえ、セクシュアリティと社会形態のあいだにも恒常的な関係があるだろう。」(⑩, I-73)

「私たちの関心事である問題に答えるためには、世界に目を向けなければならない。とくに、精神分析はなぜ女が〈他者〉であるのかを説明するのに失敗している。……その方法論には賛成できない。まず第一に、私たち

はセクシュアリティをあらかじめ与えられた事実と見る立場はとらない。……というのも、セクシュアリティとはある対象を把握するためのさまざまな方法の一つだからである。……他方、私たちは全く異なる方法で女の運命の問題を考察してみたい。……女は、私たちにとって、価値の世界で価値を求める人間と定義されるが、そうした世界の社会的、経済的構造を知ることが必要不可欠である。』¹²⁾ (⑩, I-75, 76, 78)

⑩⑪は⑨の展開としてセクシュアリティ領域の問題は、精神生活的側面を含むものであるかぎり、労働領域の問題と同じく、「自然」の問題ではなく、社会の問題であり、歴史的問題であることが再確認されている。

⑫は第二章の総括として、精神分析がセクシュアリティを他の領域から分離した所与の固定的事実として解釈しようとする方法論的狭さのため、女の〈他者〉性の解明に失敗していること、「女の現実」の全体的把握のためにはセクシュアリティを実践的認識方法の「一つ」として位置づけるべきことが指摘されている。

第三章（「史的唯物論の見解」）の導入的指摘は次の通りである。

「史的唯物論の理論は、非常に重要ないくつかの真実を明らかにした。たとえば人類は単なる動物種ではなく、歴史的現実であること。人間社会は反・自然であり、あるがままの自然に受動的に従うのではなく、人間の立場から自然を捉えなおすのだということ。この捉えなおしは内面的・主観的な作業ではなく、実践をとおして客観的に行なわれること、などである。」 (⑬, I-80)

史的唯物論の理論的真實性を以上のように確認した上で、エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』（以下『起源』）を検討し、次のように総括されている。

「歴史全体の回転軸は、共有財産制から私有財産制への移行である。しかしどうしてこのような移行が可能になったかについてはまったく示されていない。……人間を所有物に結びつける利害関係を、それについて検討もせずに認めてしまうのだ。しかし、社会制度の根源であるこの利害そのものの根源はどこにあるのだろうか。……たとえば、個別的所有という概念そのものが意味をなすのは、……まず、主体のなかに自分を根本的な個性として認める傾向、すなわち他から分離し自律した存在としての主張がなければならない。……こうしたことは単に道具だけでは説明できない。道具をもった人間の態度全体、すなわち存在論的下部構造を前提とする態度全体を把握する必要があるのだ。」(⑩, I-83, 84)

「もっと重大なことは、女を単に一人の労働者として考えるのは欺瞞であるということだ。女の再生産〔生殖〕¹³⁾機能は、個人生活においても社会経済においても、女の生産能力と同じくらい重要であ[る]。……〔しかし〕あえて義務的な性交を制度化した国家はこれまで一つも存在しなかった。……自由を強制できないのと同じように、自発性を強制することもできない。女に子どもを産むように直接、強要することはできない。できることは、女にとって母になることが唯一の逃げ道であるような状況に女を閉じ込めることだ。たとえば、法律や慣習によって女に結婚を強制したり、避妊手段や中絶を禁止したり、離婚を禁止したりするのである。今日ソ連が復活させたのは、まさにこうした旧来の家父長制的な拘束である。……女の状況を知るためには、男と女を経済的な存在としてしか見ない史的唯物論の枠の外に出なければならない。」(⑩, I-86-87)

「私たちは、……フロイトの性的一元論もエンゲルスの経済的一元論も認めない。精神分析家は、女の社会的な諸要求をすべて『男性的抗議』の現象と解釈するだろう。逆に、マルクス主義者にとっては、女のセクシュアリティは、女が置かれている経済的状况を多少とも複雑な回り道をして表現しているものにすぎない。……〔しかし〕人類の経済史同様、個人のド

ラマにおいても、その基盤には実存的下部構造が存在しており、これこそが、生命というこの個別な形態をその全体像において理解させてくれるのである。フロイト学説に価値があるのは、実存者が一つの身体であるからだ。……マルクス主義理論のなかで正しいのは、実存者のもつ存在論的要求が、実存者に与えられている物質的可能性、とくに技術によって開かれる可能性によって、具体的なかたちをとるという点にある。しかし、セクシュアリティにしても技術にしても、それらを全体的な人間の現実のなかに組み込まなければ、それだけでは何も説明できない。」(⑩, I-87, 88)

「女を探求していくうえで、私たちは生物学、精神分析、史的唯物論のもたらした功績を否定するわけではない。ただ私たちは、身体も、性生活も、技術も、人間が自分の実存の全体的な展望のなかで把握するかぎりにおいて、人間にとって具体的な意味をおびるのだと考える。」(⑪, I-88)

⑭は、共有財産制から私有財産制への移行は、個別的所有利害をもつ主体形成なしには説明できず、この主体形成は「存在論的下部構造」を前提する態度全体の検討によって解明されなければならないが、エンゲルスの作品にはこの主体形成を説明する論理が欠落していると批判している¹⁴⁾。

⑮⑯では、人間(人口)の「再生産(生殖)」の問題は、「生産(労働)」と同様に重要であるが、旧来の家父長制の方法では女性にたいする間接的な生殖強制という「経済」外的方法で人口再生産が行われていたこと、この「女の現実」の独自性を解明するためには、「史的唯物論」の思考枠組みの外に出て、セクシュアリティを「下部構造」に位置づける必要があることが強調されている。また再生産(出産育児)行為は女性の自発性を不可欠とするため、母性への「閉じ込め」という特殊な社会的間接強制という形態をとらざるを得ないこと、このことが「女の現実」の独自性を規定しているという見解が提示されている。この見解は、『第二の性』の全体構成から見て最重要な問題を含んでおり、以下ではこの問題を女の「(再生産的) 囲い込み (reproductive)

enclosure」と表現する。またこの指摘は引用文③の女性の封建的「カースト」論と深く関連する見解であり、引用文②と③を媒介しうる論点となっている。

⑮⑯のエンゲルスの作品あるいは「マルクス主義」批判の核心は、社会構成体の「土台」または「下部構造」の論理として経済一元論的立場に立ち、セクシュアリティを「土台」の論理から除外するという思考枠組み自体の神話性であり、セクシュアリティの問題を経済状況の回り道的表現（ないし「上部構造」）として捉える論理そのものが、歴史的「事実」にもとづかない神話的主張として批判されている。

ボーヴォワール自身の歴史「事実」にかんする積極的主張は別として、マルクス主義的「史的唯物論」に含まれる神話性批判の論拠については、行論の都合上、ここで明確にしておく必要がある。ボーヴォワールがここで批判の対象にしているのは、マルクスやエンゲルスの思想的言説ではなく、客観的「事実」（史実）の研究を前提し、学問的形態をとった作品のみであり、その中に含まれる神話性である。

「土台」そのものを検討した主要作品はマルクスの『資本論』とエンゲルスの『起源』であるが、ボーヴォワールは『資本論』については一切とりあげていない。それは、『資本論』が、資本主義的社会に現存する性差別、とくに「直接生産者」における性差別を伝統的家父長制の遺制と捉え、資本主義の発展はそれを必然的に解体するという歴史認識に立って、「前資本主義的要素」を学問的研究の対象外にした論理となっているからである¹⁵⁾。したがって性差別（家父長制）の問題を正面から学問的に論じているエンゲルスの作品のみが対象となる。

エンゲルス『起源』は、人間の「再生産（生殖）」の問題を社会の「土台」の考察対象外にしているわけではない。しかし「再生産」の問題を、婚姻制度を軸とした「家族の発展段階」の問題に等置した上で、「集団婚 group marriage」から「対偶婚 pairing marriage」への再生産上の変化は、人類におけ

る過去の歴史的進歩として、「未開」の中段階以前に達成されており、家父長制による「母権制」の「転覆」と「一夫一婦婚 monogamy」の成立という女性の地位にとっての決定的な変化は、再生産上の変化とは「別の原因」として、もっぱら「経済上の原因」から生じたものとされており、私有財産と一夫一婦婚を前提するその後の「文明段階」の性関係の全歴史は「経済上の原因」のみを基礎として説明されるという論理になっている¹⁶⁾。ボーヴォワールの批判はまさに『起源』のこの核心部分、モーガンやバツハオーフェンの研究にもっぱら依拠したこの部分を衝くことによって、「史的唯物論」の経済一元論の性差別論の神話性を批判するものとなっている。なぜなら『起源』のこの部分が、現代的水準での学問的検証に耐ええないとするならば、「史的唯物論」的な「経済」的性差別論も神話でしかありえないからである。

⑩は第三章のみならず、第一部全体の総括的指摘となっている。この指摘によって、『第二の性』の導入部として、なぜ生物学、精神分析、「史的唯物論」が選ばれたのか、なぜこの順序で展開し、「史的唯物論」を最後に置いたのか、この展開の背後にあるボーヴォワールの認識論は何であるかが明らかとなる。ボーヴォワールの認識論は徹底的な唯物論的認識論である。生物学と精神分析を「史的唯物論」の前に置いたのは、婚姻や家族という再生産上の制度の「物質的基礎」として、人間自然的（物質的）関係行為すなわち実践的なセクシュアリティ（性・生殖行為）が存在していること、これは社会経済構造の「物質的基礎」としての土地自然的（物質的）関係行為すなわち使用価値生産的労働行為（具体的有用労働）と唯物論的視点からは論理的に等価であり、同一論理次元に立つものであること、したがって「人間と自然」との関係は、たんに労働（生産力）の問題のみに還元されないことを明らかにするためであった。ボーヴォワールの認識論は徹底的な史的唯物論である。なぜならボーヴォワールにとって「セクシュアリティ」とは生物学的な身体生理学的側面を捨象し、人間自身の主体的活動として捉えた歴史的行為

概念であるからである。

引用文①で提起された抽象的「人間」学批判の視点からすれば、生殖と性にかんする物質的關係行為は、具体的両性行動を徹底した史的唯物論的視点から観察するために不可欠な視点である。マルクス＝エンゲルスの学問的産物としての『資本論』や『起源』およびそれらを含む諸作品の総括としての「史的唯物論」は、具体的両性人間学的方法的基礎としての徹底した史的唯物論的視点から見れば、抽象的「人間」行動すなわち抽象的「人間」労働の体系化にすぎず、不徹底な「史的唯物論」、いわば「労働論的史的唯物論」にとどまっており、その結果、両性関係にかんする労働論的「運命」論に陥っている。

マルクス＝エンゲルスの社会科学的認識論は史的唯物論であるが、この方法を導きの糸として研究された学問的作品がどこまで史的唯物論的方法を徹底したものであるか、学問的作品の総括的定式化としての「史的唯物論」がどこまでその視点を徹底したものであるかという問題はおのずから別個の問題である。なぜなら作品としての「史的唯物論」の前提となる歴史的「事実」にかんする認識は、当時の歴史研究の水準に限界づけられざるをえないからである。この意味で認識方法論としての史的唯物論と作品としての「史的唯物論」とは区別されなければならない。引用符の有無は両者を区別するための形式論理的手続きである。

マルクス＝エンゲルスが、「文明段階」（階級社会）における性差別（性的疎外）の研究方法として、セクシュアリティ（性・生殖行為）を「土台」研究から捨棄したのは、それを非物質的行為と見たりあるいは純生物学的問題と見たからではなく¹⁷⁾、セクシュアリティの核心としての「個人的性愛 individual sex-love」は人類の長期的歴史の結果として既に形成済みであること、階級社会の性関係における性差別や性的疎外は経済的關係としての「家父長制」や「ブルジョア的諸関係」に規定されたものであって、物質的關係行為としてのセクシュアリティそれ自体には性差別や性的疎外の要素は含まれていな

いこと、したがって現実の性関係を規定している経済的要因を除去しさえすれば、「個人的性愛」はそのま未来社会に発展的に継承されていくという歴史認識（歴史仮説）が前提されていたからである¹⁸⁾。ボーヴォワールの「史的唯物論」批判は、認識方法論としての史的唯物論に向けられているのではなく、セクシュアリティにかんするマルクス＝エンゲルスの歴史的「事実」認識自体に向けられたものであることは、第一部の章別展開とその叙述全体から確認することができる。

以上のことから論理的に派生する問題は、第一部全体の総括としての「経済」的一元論批判の場合の「経済」概念にかかわる問題である。マルクス＝エンゲルスの作品としての「経済」概念と「土台」の総体的把握の方法論としての経済学批判とはやはり明確に区別しなければならない。作品としての「経済学」または「経済学批判」（現行『資本論』他）が、どこまで「土台」の総体的把握としての経済学批判の方法的課題を実現したものであるかはおのずから別個の問題であるからである。経済学批判という用語の引用符の有無は両者を区別するための形式論理の手続きである。

ボーヴォワールの「史的唯物論」視点からは、現実に存在する両性の具体的経済行動差について『資本論』も『起源』も史実を踏まえた概念的説明に失敗している。ボーヴォワールの「経済」的一元論批判は、「土台」または「下部構造」の総体的把握のための研究課題の提起であり、具体的両性行動を視野に入れたボーヴォワールの「経済学批判」の「研究課題」^{プロジェクト}を提示したものであると言える。これは「土台」の総体的把握のためのマルクスの「研究計画」^{プロジェクト}としての「経済学批判体系」の「プラン」¹⁹⁾と論理的に同次元に属するものである。したがって『第二の性』と現行『資本論』との比較検討はまずこの論理次元、すなわち「土台」の総体的把握のための経済学批判の方法とはどのようなものでなければならないかという根本問題の再検討の上に立つて行われなければならないと言える。

3. 第二部「歴史」

第二部は引用文⑤で予告されているように「どのようにして『女の現実』なるものがつくられたのか、なぜ女は〈他者〉として定義されたのか……を実証的に示」すことが「歴史」の検討課題であり、またこのことは引用文⑨でも再度強調されている。第二部ではタイトルを付さないIからVまでの各部分が、採取・狩猟中心の原始社会²⁰⁾、原始農耕社会や先史社会、古代オリエントやギリシア・ローマを中心とした古代社会、ヨーロッパの中世・近世史、フランス革命以後の欧米の近現代史を対象として叙述されているが、提起された課題の「実証」には完全に失敗している。Iの導入部と、Vの総括と末尾の指摘を引用しよう。

「この世界はいつも男のものだった。これまでいろいろの理由が示されたが、私たちにはどれも十分とは思えなかった。実存主義哲学の光のもとで先史学や民族誌学の資料を再検討してはじめて、男女の序列がどのように確立したのかが理解できるだろう。」(⑩, I-91)

「以上の歴史について……の結論は、女の全歴史は男によってつくられたということである。……男の手に握られた経済的特権、男の社会的価値、結婚の威光、男の後盾の効用、こうしたすべてのことが男に気に入られるように女を切望させる。女は全体としてまだ従属的状况にある。その結果、女は自分としてあるがままに存在するのではなく、男が女を定義するように自分を認識し自分を選択してしまうのだ。したがって、私たちはまず、男が夢想している女を描いてみる必要がある。なぜなら、『男にとって女のあり方』が、女の具体的条件の主要な要因の一つになっているからである。」(⑩, I-188, 198)

見られるように「女の現実」の「歴史」は原始社会から現代に至るまで終始一貫した男性支配の「歴史」であり、男女の「相互性 reciprocity」の欠如した女の〈他者〉性の一貫した「歴史」として叙述されている。したがって女の〈他者〉性の歴史的生成の実証には完全に失敗していることは明らかである。

第二部の叙述は、実証の失敗にとどまらない。序文や第一部で展開したボーヴォワール自身の重要な指摘と矛盾する叙述が随所に見られる。たとえば、I (原始社会) では「もちろん産児調節などまったくされていなかったし、……度重なる出産で女たちの体力は使いつくされてしまったにちがいない。……途方もない多産のせいで、女は資産を増やすのに積極的に協力できず、一方で新しい需要を際限なく生み出していたのだ。……再生産〔生殖〕²¹⁾と生産のバランスを保ったのは男である。……女は自分の生物学的運命に受動的に従うだけなのだ。」(I-92, 93) と何らの限定もつけずに述べている。これは第一部における女の母性「本能」や生殖「本能」否定論の立場、したがって女の「再生産(出産育児)」行為には女の自発的意志を必要とすること、社会的な出産育児強制のためには女の「母性」への「囲い込み」という間接的強制が必要とされるという⑮の重大な指摘とも矛盾する叙述である。未開社会を含む前近代社会には、女の性交拒否や性交タブー(膈内挿入のない両性の性器接触オーガズムを含む)、膈外射精(男性器尿道の外部開口切開等の性器加工慣行なども含む)、中断性交、タンポン利用と洗浄等の多様な避妊、薬草やマッサージおよびその他の物理的方法による中絶(流産)、間引きや隠蔽された間引きとしての育児(授乳)放棄や授乳中の「窒息事故死」等の多様な「再生産(生殖)」調整手段があったことは事実であり²²⁾、それによって女性が出産育児(授乳)拘束による身体の不自由化と労働の過重化を自主的に回避することは十分可能であったこと、したがって第一部の生物学的運命論批判、とくに母性「本能」論批判と引用文⑮の指摘は今日の学問的水準から見てきわめて価値の高い重要な指摘であるにもかかわらず、「歴史」叙述としてはそれ

よりはるかに後退し、それと矛盾する叙述となっている。

そればかりではない。歴史の諸力として、女の「再生産」能力を男の「生産」能力にたいする「負」の要因として捉える見方が基礎となっており、これは第一部で批判した生物学的運命論と同一の論理であるばかりではなく、「再生産」にたいする「生産」の優越性を認めるかぎり、マルクス主義の「史的唯物論」的運命論と共通した論理に陥った叙述となっている。

原始的採取社会や原始的農耕社会の歴史叙述で決定的な役割を果しているのは、ボーヴォワール自身も認めているように、C. レヴィ=ストロース『親族の基本構造』である²³⁾。この作品をバツハオーフェンなどの「母権制」論批判の最新の研究成果として利用するのは妥当ではあったとしても、そこからただちに母系制や双系制を含む全未開社会における男性支配制または男性優位制と、男女間の「相互性」の欠如した女の〈他者〉性とを歴史貫通の事実として認めてしまうことは論理的飛躍である²⁴⁾。ここでのレヴィ=ストロースの作品の利用法は、第一部での検討のように一定の功績を認めた上での徹底批判という方法とは全く異なり、序文①の指摘とは全く矛盾する取り扱いとなっている。ボーヴォワールはレヴィ=ストロースとは学生時代からの深い親友関係でもあり、『親族の基本構造』の校正刷を急遽利用して叙述したという事情をも考慮するなら、この部分は『第二の性』の作品価値における決定的な瑕疵と言うほかはない²⁵⁾。

1949年以前には、女性の人類学者、先史学者、歴史学者はほとんど欠如しており、また女性の知識人も一部の例外を除きセクシュアリティ（性と生殖）問題にたいし文献上で公然と発言する者はほとんど存在しなかった。このような状況の下では、セクシュアリティ（性と生殖）や再生産制度の問題について、男性的「神話」を除去した客観的歴史「事実」を「実証」することは、学問の生産者としての研究者や知識人の男性独占の状況から見て全く不可能であること²⁶⁾、むしろこの不可能性を第二部の「歴史」叙述は結果的に実証していると言える。

引用文①の批判的視点を堅持しようとするかぎりボーヴォワールは第二部では、歴史学の生産者の男性独占の状況を考慮して客観的歴史的「事実」の実証は断念し、むしろ『第二の性』の目的が女が直面している「問題」の明確化であることに留意した上で、引用文①の立場から、男性独占の歴史学(男性独占人類学や先史学を含む)にたいし、ボーヴォワールの「史的唯物論」視点にもとづいてセクシュアリティや再生産制度に関連した根本的な問題をつきつけることにとどめるべきではなかったかと思われる。

以下はボーヴォワールの「史的唯物論」的視点から当然設問されるべき歴史学(人類学, 先史学を含む)への根本的な問である。

- A. 階級社会以前の未開社会や先史社会では女性の自発的「再生産(出産育児)」行為を担保するためにいかなる社会的条件が必要であったのだろうか。
- a₁. 女性が「真実の財産 real property」としての「生産手段」すなわち土地財産にたいする利用権または占有権を無条件で保障され、自らが育児(授乳)した子供または養育子に土地占有権を自己決定として与えることができること、すなわち母系制または双系制が女性の自発的再生産行為の決定的な社会的担保条件となっていたのではないか。
- a₂. 子供の数が一時的部分的に増加しても、土地の利用・占有権を無条件で与えることが可能のように大量の未利用地を維持すること、言い換えれば土地の「人口収容力」よりはるかに低水準の人口密度を維持するための女性主導の「再生産(生殖)」調整が、女性の自発的育児(授乳)行為のもうひとつの社会的担保条件となっていたのではないか²⁷⁾。
- B. 剰余労働を含む長時間労働と自由時間制限が「直接生産者」に強制される階級社会(前資本主義社会)では、搾取源泉としての人間の「再生産(出産育児)」行為という身体的自由制限と追加的労働強化をいかにして女性に強制できたのであろうか。

- b₁. 女性が「母」となる以外に生存が保障されない状況への女性の社会的「囲い込み」がそのための唯一の手段だったのではあるまいか。具体的には男性「直接生産者」のみに土地占有権を与え、女性の土地占有権を剝奪すること、土地占有者たる男性と「世帯」を形成し、「再生産（出産育児）」行為を行うことによってのみ、女性に土地利用権や生存権が与えられるという制度すなわち「直接生産者」層における父系的家父長制の形成が、女性の「再生産的囲い込み」のための不可欠な条件ではなかったのだろうか。
- b₂. 同時に「逃げ場の剝奪」²⁸⁾として広大な領域の私的または国家的領有によって未利用地の勝手な土地利用を排除し、とくに女性の土地占有発生の可能性を全面的に排除する体制が不可欠だったのではないか。
- b₃. 借家（や持家）市場を含む自由な「生活手段」市場の形成を阻害あるいは制限することによって、「生産手段」としての土地占有 land-holding から分離した「世帯 household」形成の可能性を除去あるいは限定することも必要だったのではあるまいか。
- b₄. 男女共に人格的自由と土地占有権を剝奪された奴隷の場合、「世帯」形成が不可能であったばかりか、女奴隷にたいする「再生産（出産育児）」行為の社会的間接強制手段は全く欠如していたのではあるまいか。したがって「奴隷制」とは内的な「再生産（生殖）」基盤を欠如し、常に外部からの奴隷供給に依存した制度であり²⁹⁾、自己完結的「奴隷制社会」なるものは歴史上存在しえなかったのではないか。
- C. 原則として男女の「直接生産者」が形式的平等と人格的自由の権利を持ち、「生産手段」としての土地占有から男女とも分離された資本主義社会の場合、剰余価値のため長時間労働と自由時間制限の傾向が強化される中で、搾取源泉としての賃金「奴隷」の「再生産（生殖）」はいかにして実現されたのであろうか。伝統的な女性の「再生産的囲い込み」制度としての男性「直接生産者」の土地（生産手段）占有が解体されただけで

なく、借家(や持家)市場を含む自由な「生活手段」市場が出現し、「生産手段」としての土地占有 land-holding から分離した「世帯 household」形成が可能となり、「生活手段」市場の発展を通じて「個人世帯」形成の可能性すら創出される状況下でいかにして女性の「再生産(出産育児)」行為による身体的自由制限と追加的労働強化を強制できるのだろうか。外見的には性差別を含まない法形式を創出しながら、女性の「再生産(出産育児)」行為の社会的間接強制すなわち母性への「囲い込み」を実現するためには伝統的家父長制とは全く異質ではるかに高度な「再生産的囲い込み」システムが必要であろう。このシステムはどのようなものであり、いかにして形成されたのであろうか。この問題こそ、資本主義社会における特殊歴史的「再生産(生殖)」基盤とは何かという根本問題であるが、現行『資本論』の論理的枠内では全く未解明な問題である³⁰⁾。

以上は第一部の基本的論旨としてのボーヴォワールの「史的唯物論」視点からの必然的な設問であると同時に、『第二の性』の全体構成からも必然的に提起される設問でもある。この点については全体構成の総括の中で示す。

男性独占的歴史学が母性「本能」や生殖「本能」を暗黙の前提とすることで、社会の歴史的「再生産(生殖)」基盤という根本問題の研究をいかに軽視してきたかを、女性の立場から史学史的に「実証」することで、第二部「歴史」のボーヴォワール自身の「投プロジェクト企」は十分に達成されたであろう。

[次号に続く]

[注]

- 1) 摘記には通し番号を付し、引用部分をI-11のように略記する。I巻11ページという意味である。
- 2) 男女両性の心理領域または人格の発達過程における「両性具有(アンドロジニー)」性や性別(sex)と性自認(gender)のズレという問題を考慮したとしても「中性はありえない」(『第二の性』II, 564ページ)ことに留意されたい。また『第

二の性』のこの研究視角は、本編のみならず、第二、三編全体を貫く基本的研究視角でもある。本稿では『第二の性』の訳文（「女」「男」との関連で、「女(性)」、「男(性)」という表現は比較的自由に使用するが、主として gender 問題を主題にするため「女性」「男性」という表現を中心とする。また明確に「女」「男」または「女性」「男性」と引用符を付して表現した場合、前者が性別 (sex)、後者が性自認 (gender) を意味している。

- 3) []内は引用者。以下〔 〕内はとくに断らないかぎり、引用者による。
- 4) Simone de Beauvoir, *Le Deuxième Sexe*, I, Gallimard 1949, p.17. なお「相互性 reciprocity」[Simone de Beauvoir, *The Second Sex*, ed. H. M. Parshley, Penguin Books, p.17] は経済人類学では「互酬性」と訳されているが、第二編では、両性関係の問題のみならず、「市場経済」の歴史的条件の検討を行う際にも、この「相互性」用語を key 概念として使用する。なお reciprocity を人類学でも「相互性」と訳した方が、哲学や社会学との関連性の明示のためにも適切であるという点についてはマーシャル・サーリンズ (山内昶訳) 『石器時代の経済学』法政大学出版局, 1984 年 (原書 1972 年), 419-420 ページ参照。しかし「相互性」では reciprocity の含意する「互恵 (関係) 性」という具体的な意味が失われるので、本稿では適宜「相互性 (互恵性)」あるいは「相互性 (互酬性)」のように記載する場合もある。この場合原語としては「réciprocité/reciprocity」の一語である。
- 5) Beauvoir, *op. cit.*, p.20; Beauvoir, *op. cit.*, ed. Parshley, p.20.
- 6) シュヴァルツァー前掲書, 47-48 ページ参照。なお、「家来」という訳語は、保護と扶養の代償に主人に奉仕するために「世帯 household」に来た者という意味を含んでおり、適訳である。
- 7) Beauvoir, *op. cit.*, p.31; Beauvoir, *op. cit.*, ed. Parshley, p.29.
- 8) ボーヴォワールは既存の学問体系を「男性文化」と一括批判し、それとは別個の「女性文化」や「女性言語」を創出しようとするような一部のフェミニストの態度は、女の問題を「ゲッター」化するものであるとして徹底的に批判的であった。これはマルクスの古典派経済学にたいする「経済学批判」の態度と同じものである。シュヴァルツァー前掲書, 57-59 ページ, フランシス/ゴンティエ前掲書, 570-571, 587 ページ参照。
- 9) ケイト・ミレットの「性の政治(学) sexual politics」のように、性関係それ自体を直接的な「権力関係」の視角から考察するアプローチ (ミレット前掲書) とは異なる。またボーヴォワール自身は文学者であるにもかかわらず、ソシュールなどの言語学は、第一部の検討対象から除外している。(ソシュールは II 巻ではじめてとりあげられる。)
- 10) ヘーゲル『自然哲学』岩波書店, 1999 年, 674-678 ページ。

- 11) 「人間自然」「土地自然」の概念については、さしあたり梅垣邦胤『資本主義と人間自然・土地自然』勁草書房、1991年参照。
- 12) 『第二の性』の訳文としては「セクシュアリティ」の部分は「性^{セクシュアリティ}欲」と訳されているが、対象把握の実践行為としてのセクシュアリティという文意を考慮して「性欲」を削除した。
- 13) []は原訳文のもの。
- 14) この点に関連して、エンゲルスは「どのようにして、またいつ、畜群が部族または氏族の共同財産から個々の家長の所有に移ったか、これまでのところわれわれは何も知ってはいない」と述べ、この問題点自体については事実上認めている。『マルクス＝エンゲルス全集』（以下『全集』と略称）第21巻、大月書店、161ページ。先史社会の問題についてはさておき、ボーヴォワールのこの問題提起を受けて、第二編では、近代への移行期における共同体的土地占有関係の最終的解体要因について、「直接生産者」層における「個人的（私的）所有」主体の形成という角度から検討するが、その際「直接生産者」層における「相互性（互酬性）reciprocity」の解体と「禁欲的エートス」の形成という労働・生活的心性の変化に着目し、この変化についてボーヴォワールの「下部構造」（＝「土台」）の視点、すなわち女の近代的「再生産的囲い込み」（後述⑮⑯の解説および3のC項参照）の視点からの考察を行う。
- 15) 『全集』第23巻（『資本論』第1部）大月書店、8-10、364-391、514-525、599-658（とくに637-638）ページ。また二宮厚美「ジェンダー視点の社会政策と資本主義の解剖」（佛教学大学総合研究所編『ジェンダーで社会政策をひらく』ミネルヴァ書房、1999年所収）は、現行『資本論』の論理の枠内にとどまるかぎり、伝統的家父長制と資本主義とは対立しつつもそれが再編的に温存される可能性は認められるとしても、現行『資本論』の論理を近代的性差別（「資本主義的家父長制」）の論理と接合ないし両立させることは不可能であることを論証している。しかしこの論考は「プラン」問題（注19）参照）への目配りが欠落している。
- 16) 『全集』第21巻、27-87、158-177ページ（引用符の部分は58、80ページ）。Karl Marx Frederick Engels Collected Works, Moscow 1990, Vol.26, pp.131-190, 256-276.
- 17) 『全集』第21巻、27ページ、『全集』第40巻（『経済学・哲学手稿』）、456ページ参照。
- 18) 『全集』第21巻、80-86ページ。長期の一夫一婦婚 monogamy の歴史によって形成された「個人的性愛 individual sex-love」が経済的単位としての「家族」が消滅した後の未来社会にも継承されるという展望は、再生産上の「進歩」の方向の「文明段階」以前を含む長期的歴史による確定という歴史認識（歴史仮説）を根拠

としたものである。しかしこのような単線的進歩史観による「婚姻」制度論的「再生産（生殖）」視点では、再生産制度の基礎としてのセクシュアリティ（性・生殖行為の様式）の歴史具体的変化の諸相と近代社会における性的疎外の内的実態を把握することはできない。

- 19) 「プラン」問題についてはさしあたり『全集』第23a巻、「注解」1-5ページ参照。「プラン」の前三項として(一)「資本」、(二)「土地所有」、(三)「賃労働」の性格にかんしての独自の論考は、さしあたり梅垣前掲書、尾崎芳治『経済学と歴史変革』青木書店、1990年参照。この両書とも現行『資本論』論の範囲を越えた問題として、(二)「土地所有」の(三)「賃労働」と(一)「資本」への独自「権能」についての深い考察はあるが、残念ながら(三)「賃労働」についての現行『資本論』の論理的枠を越えた考察は十分ではなく、人間自然的関係行為（性・生殖行為）の独自性・根源性についての考察が欠如している。
- 20) 原始社会（ボーヴォワール自身の認識としても相続財産としての家畜を欠如した狩猟採取社会）の訳文中に原始「遊牧民」および「遊牧民(族)」という訳語が見られるが、これは、原始「集団 horde [英訳 horde]」または原始「遊動集団 horde」および「遊動民 nomade [英訳 nomad]」と訳すべきであろう。『第二の性』I, 93, 96, 97ページ。Beauvoir, *op.cit.*, pp.110, 113, 114; Beauvoir, *op.cit.*, ed. Parshley, pp.94, 97. なお英訳本ではIの部分に「The Nomades」というタイトルがつけられているが、このnomadeの意味に関連して齊藤日出治『ノマドの時代』大村書店、1999年、186-194ページ参照。
- 21) []内は原訳文のもの。
- 22) これらの問題は第二編で検討する。
- 23) 『第二の性』I, 349-350ページ。
- 24) リーアン・アイスラー『聖杯と剣 われらの歴史、われらの未来』法政大学出版局、1991年（原書1987年）は「母権」制か「父権」制かという二分法を批判し、母系制による「(女男)協調形態」社会から父系的家父長制による「支配者形態」社会への転換を「生産力」的必然論ではなく、歴史的進化の方向転換として叙述している。これは最新の人類学、先史学、神話学のジェンダー視点からの大量の新知見をもとにして『第二の性』の第二部「歴史」の書きかえを意図した作品である。
- 25) 『第二の性』I, 349-350ページ、フランシス/ゴンティエ前掲書、135ページ。
- 26) 女性人類学者マーガレット・ミードの1935年の業績および1949年の業績は、ジェンダー視点による新しい人類学の出発点となった作品であり、この作品の意義については後にボーヴォワールも高く評価しているが、『第二の性』では利用されなかった。マギー・ハム『フェミニズム理論辞典』明石書店、1999年、190ページ、ジョゼ・ダイヤン『ボーヴォワールと語る 『第二の性』その後』人文書院、

1987年, 114 ページ。

研究者層や知識人層が大量形成され、学問も高度に発展しているかのように見える現代ですら、セクシュアリティ研究は最も遅れた分野であり、女性の「膣オーガズム」の有無というきわめて基本的な問題ですら、学術的レベルでは未解決なままである。これは、セクシュアリティに関心をもつ女性研究者層がきわめて薄いこと、セクシュアリティ研究者の性別構成がきわめてアンバランスであることの不可避的な結果である（この問題については後にとりあげる）。現代のセクシュアリティにかんする最も基本的な問題ですら未解明であるとするれば、未開社会や先史社会についてのセクシュアリティや再生産制度にかんし、男性「調査者」（人類学者、民族学者）や男性「研究者」（先史学者、考古学者）による調査・研究には、近代の男性心理特有のバイアスを生じ、とくに女性の性・生殖行動の真相解明が不可能化するのとは当然のことであろう。

- 27) 未開採取社会や未開農耕社会の場合、例外なく土地の「人口収容力」よりはるかに低い人口密度である。この低水準の人口は、「低生産力」の結果ではなく、1日平均3~4時間程度の労働で十分な「生活手段」（食料等）を確保できるという未開社会に共通する短時間労働の条件の下での人口であり、高死亡率の結果というよりは、むしろ「再生産（生殖）」調整の結果としてしか説明できない。サーリンズ前掲書、8-118 ページ参照。
- 28) 梅垣前掲書、173-176 ページ。
- 29) ウェーバーの古代地中海世界における「奴隷制」認識はこれと同様である。マックス・ウェーバー『古代社会経済史』東洋経済新報社、1959年、10-13, 424-433, 492-500 ページ。
- 30) 「なぜこの自由な労働者が流通部面で自分の前に立ち現れるかという問題には……貨幣所持者は関心を持たない。そして、この問題はしばらくわれわれの関心事でもない。」「資本家は〔労働力の再生産という〕この条件の充足を安んじて労働者の自己維持本能与生殖本能とに任せておくことができる」（『全集』《『資本論』第1部》第23巻、222, 745 ページ。〔 〕内は引用者）として現行『資本論』では資本主義の特殊歴史的「再生産（生殖）」基盤という根本問題は研究の対象外にされている。なお第1部第24章（「いわゆる本源的蓄積」）でも「再生産（生殖）」の問題は検討の対象外である。